

令和元年度 日本大学文理学部個人研究費 研究実績報告書

所属・資格 英文学科・助手

申請者氏名 一瀬 厚一

研究課題		近現代世界文学および哲学におけるエマソンとホイットマンの受容と発展について
報告の概要	研究目的 および 研究概要	19世紀アメリカ文学の作家、ラルフ・ウォルド・エマソンとウォルト・ホイットマンは、ヨーロッパからの知的独立を求め、アメリカ的な文学模索していた。例えば、ホイットマンが『草の葉』序文において言及しているが、アメリカはあらゆるものを受け入れ、包摂するという姿勢を、文学や政治（民主主義）において展開していく。この姿勢は、文学的側面からみると、比較文学的な視座といえよう。例えば、エマソンは、洋の東西を問わず、文学・哲学を涉猟し、自身の文学を打ち立てている。こういった世界文学的な視座をもった作家が、後代の世界文学においてどのように受容されたか、特にホルヘ・ルイス・ボルヘスがどのように受容・発展させたのか、つまりその間テキスト性について考察することを目的とする。
	研究の 結果	世界文学におけるエマソンとホイットマンの受容について、比較文学的な視点から研究を行った。近現代の世界文学的作家ホルヘ・ルイス・ボルヘスが、ホイットマンとフランスの作家ポール・ヴァレリーの類似性に言及している。そのことを出発点として、ホイットマンとヴァレリーには一見すると多くの相違点が窺えるが、文学を創作する、あるいは読むときの姿勢、つまり創作の対象・読む対象と同化するという姿勢において、両者は一致していることを明らかにした。言い換えれば、対象に同化するという文学的態度は、ホイットマン（アメリカ）のものだけではなく、世界文学に共通する事項の一旦であることを示した。またエマソン、ホイットマン、ボルヘスの関係性・類似性についても考察した。この三者は、人間は宇宙の一部である、それゆえに個人は無限の価値をもつ、という思想において一致しており、その思想が19世紀アメリカ以降連綿と継承されていることを明らかにした。
	研究の 考察・ 反省	エマソンやホイットマンは社会的コンテキストにおいて研究することも重要であるが、思想的コンテキストにおいて考察することが重要であるため、後者に焦点を当てて研究を行った。ただ、思想的コンテキストを世界文学的な視座から考察するためには、世界の文学、哲学を涉猟する必要があり、ホイットマンやヴァレリーのような個別的なケースの研究では不十分な面も多い。そのため今後の研究では、個々の作家、思想家に焦点を当てるのみならず、イデオロギーごとの分析（民主主義や汎神論など）を行い、総合的な視点からエマソンとホイットマンを研究する必要があると考える。
研究発表 学会名 発表テーマ 年月日/場所	※この欄は、本報告書提出時点で判明している事項についてご記入ください。 〈研究発表〉 ・日本ホイットマン協会 「ホイットマンとポール・ヴァレリー」 2019年10月26日（土）日本ホイットマン協会ホイットマン生誕200年記念第57回全国大会（於：日本大学法学部）	
研究成果物 テーマ 誌名 巻・号 発行年月日 発行所・者	・日本大学英文学会 「エマソンはどのように読まれたか——世界文学の観点から」 2019年12月14日（土）日本大学英文学会2019年度学術研究発表会（於：日本大学文理学部）	